原著

COVID-19 禍における看護大学生の職業意識に影響する自己効力の学年間比較

宮本佳子 [1)]，西山忠博 [1)]

[1)] 森ノ宮医療大学 看護学部 看護学科

要　旨

本研究の目的は、COVID-19 禍における A 看護大学生 1 ～ 4 年生に職業意識に対する自己効力調査を実施し、学年間比較の結果から職業意識に対するサポート体制について示唆を得ることである。進路選択に対する自己効力尺度 30 項目 4 件法を使用し、自記式質問紙調査を行い、A 看護大学生 297 名から回答を得た。二元配置分散分析を用いて、学年間による自己効力の違いと職業意識による自己効力の違いを分析した。その結果､学年間と職業意識の違いの双方で自己効力得点について､有意差（$p < 0.01$）が見られた。3 年生の自己効力得点が、他の学年と比較して低く、職業意識に対しても看護師になることについて消極的な回答が多かった。そのことから、COVID-19 禍における 3 年生のサポート体制としては、メンタルヘルスケアの必要性、感染予防対策の教授、学内実習の充実化が重要であることが示唆された。

キーワード：COVID-19，看護学生，職業意識，自己効力

連絡先：宮本 佳子　MIYAMOTO Yoshiko
〒 559-8611　大阪市住之江区南港北 1-26-16
森ノ宮医療大学看護学部看護学科

Ⅰ. はじめに

現代の若者特徴として、IT 化による情報化社会の変容や核家族の増加といった家庭環境の変化に伴い、関係性を持つことへの苦手意識[1]や、内面の開示を避け、お互いに傷つけ合わないよう気を遣い、他者との関係が希薄化しているなどの傾向[2]が指摘されている。箕浦ら[3]は、現代の若者のコミュニケーションの特徴について、人と人との関係がメールや SNS でのやり取りで“直接の会話”ではなく、“おもにインターネット上”で繰り広げられるようになってきたことは、直接的な人との関係を避けることもできる社会環境へと変化していることを述べている。これは、将来、社会で活躍する若者の中には、対面におけるコミュニケーションや人間関係構築が円滑に行えない傾向が増加すると推察される。

そのような若者の特徴を持った大学生が、職業選択し決定することは、青年期にとって重要な課題である。青年期の発達段階において、自我アイデンティティを形成するとされ、この段階の危機としてアイデンティティの拡散があり、職業的アイデンティティを決められないことが若者の混乱招いている[4]。

将来看護専門職を職業とする医療系の大学に進学する学生は、看護職に高い意識を持つ学生もいれば一方で、「他者の勧め」や「なりたいものがないからなんとなく」いう目的意識が低い学生も散見させる[5]。実際、筆者も学生との関わりの中で、看護職への不安を感じ、「こんなはずではなかった」、「自分は向いているのか」と葛藤している姿が見受けられた。吉岡ら[6]は、「看護大学生の職業意識の特徴」で、将来、仕事で活用できる知識や技術を身につけたい半面、高度なものを目指すのではなく、資格を取得することに重点をおいていると報告されている。教員として、そういった学生の特徴を捉え、職業意識に対する支援体制の検討を行っていく必要性を感じている。

そして、2020 年には COVID-19 の蔓延に伴い、看護教育現場では、座学からオンライン授業の対応、実習施設から実習を断られるなど、看護学生が看護教育を受ける機会も変化し、看護職に対する思いがさらに変化しているのではないかと考えた。筆者が実際に接した学生からも「看護師になるのが怖くなった」、「看護師という職業を選択したことを後悔している」という発言がみられた。この COVID-19 禍における職業意識の程度を看護教員として理解することは、職業意識に対するサポート支援を行う上で重要であると考える。

職業観を測る視点の一つとして自己効力がある[7]。自己効力とは、ある行動が自分にうまくできるかどうかという予測の認知されたものであり、行動と直接的な関連を持つもの[8]と仮定されている。浦上[7]は、進路選択に対する自己効力について、「進路選択に対する自己効力の強い者は、進路選択行動を活発に行ない、努力する。一方自己効力の弱い者は、たとえそれが自分の人生の目的を達成するために必要なものとして理解しても、進路選択行動を避けたり、不十分な活動に終始してしまうと考えられる」と指摘しており、看護師を進路選択した看護学生の自己効力の程度を知ることは、職業形成問題の観点からも有効であると考える。

そこで本研究では、COVID-19 の蔓延下において、看護学生が入学後、どの学年から職業意識に対して変化が起こってきているのか、看護師という職業意識に影響する自己効力に関して、自己効力の変化がないかを調査した。その調査結果から示唆されたことで、学生の職業選択の自覚と自立した行動を養い、積極的に看護師を目指すための支援方法を考える一助にしたい。

Ⅱ. 目的

本研究では、A 看護大学生の職業意識に対する自己効力調査を実施し、その結果からどの学年が自己効力及び看護師への職業意識が低下するのかを知り、サポート体制について示唆を得ることを目的とした。

Ⅲ . 用語の定義

1. 自己効力

自己効力とは、ある行動が自分にうまくできるかという予期の認知されたものであり、行動と直接的な関連をもつ[8]とされており、本稿で使用する尺度は、浦上[7]の進路選択に対する自己効力尺度であり、看護師という職業選択に対する自己効力とした。

Ⅳ . 研究方法

1. データ収集期間

調査期間は、対面授業が可能となった 2020 年 7 月～ 10 月に実施した。

2. 調査対象者

A 看護大学の特徴として、看護師だけでなく保健師、養護教諭（保健師、養護教諭は選択）の免許取得を目指せる教育プログロムを有する大学である。学年により若干の差はあるが全体の 15％程度が男子学生である。

今回の調査においては、A 看護大学に在籍している 1 ～ 4 年生の同意の得られた学生を対象とした。各学年の授業終了後に口頭と文書にて説明を行い、回収箱を設置し、アンケートの回答をもって同意と見なした。

3. 調査内容

以下の項目を無記名自記式質問紙により調査をおこなった。

1）基本属性（学年、性別）

2）決定した看護職種への思いを「絶対になる」、「迷いが出てきた」、「なりたくない」、「わからない」の 4 段階でおこなった。また、悩んだ時に誰に相談するのかを「親」、「友達」、「兄弟・姉妹」、「先輩・後輩」、「その他」で調査をおこなった。

3）浦上[7]の「進路選択に対する自己効力尺度」を使用し実施した。著者には、尺度使用の許諾を得ている。「進路選択に対する自己効力尺度」は、30 項目からなり、「非常に自信がある」「少し自信がある」「あまり自信がない」の 4 件法で、この尺度は、大学生や短大生を対象としている尺度であり、信頼性、妥当性が検証されている。

4. 分析方法

基本属性については単純集計をおこない、その他のデータ分析には、jamovi(version 2.3.21.0) を使用し、尺度の採点方法に従い回答者ごとの 30 項目の合計点と看護師に対する思いについて、二元配置分散分析をおこなった（回収率 91.6％、有効回答率 97.7％、各項目の欠損値については除外した）。その際の有意水準は 5％とした。

5. 倫理的配慮

本研究は、研究者所属大学の倫理審査委員会にて承認（2020-010）を得て実施した。研究対象者には、口頭および文面で研究の目的、方法、参加は自由意志であり、成績評価に影響しないこと、参加しないことで不利益は被らないこと、匿名性の保持、プライバシーの保護、研究目的以外に使用しないことを説明した。

Ⅴ. 結果

A 看護大学における学生に調査をした結果、以下の結果が得られた。

1. 調査対象者の基本属性（表 1）

1 年生は 89 名で男子学生 13 名（回収率 100％）、2 年生は 80 名で男子 10 名（回収率 100％）、3 年生は 77 名で男子 11 名（回収率 90.5％）、4 年生 51 名で男子 9 名（回収率 72.8％）の計 297 名（回収率 91.6％）から回答が得られた。希望職種に関しては、全学年看護師希望が高く、2 年生は 62.5％と最も低かった。また、2 年生は、保健師、助産師希望が他の学年より高い結果となった。

表 1　対象の基本属性　　N = 297

性別（人）	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生
男性	13	10	11	9
女性	76	70	66	42
希望職種（％）				
看護師	78.7	62.5	83.1	86.3
保健師	14.6	13.8	5.2	2.0
助産師	5.6	17.5	7.8	7.8
養護教諭	0	5.0	3.9	0

2.「決定した看護職種への思い」について（図 1）

1 年生は、「絶対になる」は 77.5％、「迷いが出てきた」は 7.9％、「なりたくない」は 1.1％、「わからない」は 12.4％。2 年生は、「絶対になる」は 66.3％、「迷いが出てきた」は 16.3 ％、「なりたくない」は 3.8％、「わからない」は 12.5％。3 年生は、「絶対になる」は 46.8 ％、「迷いが出てきた」は 26.0％、「なりたくない」は 14.3 ％、「わからない」は 11.7％。4 年生は、「絶対になる」は 70.6％、「迷いが出てきた」は 5.9％、「なりたくない」は 3.9％、「わからない」は 15.7％で、3 年生は、「絶対になる」が他の学年より低く、「迷いが出てきた」、「なりたくない」が他の学年より高い値を示していた。

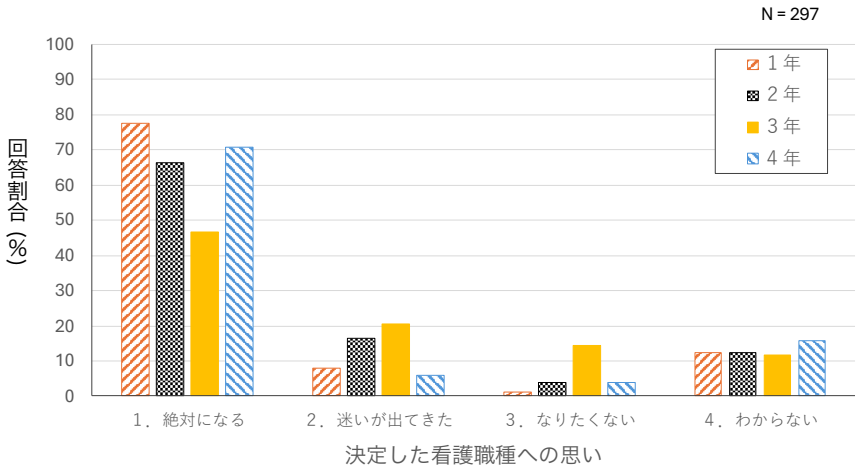

図 1　決定した看護職種への思いの学年比較

3.「悩んだ時は誰に相談するか」（複数回答可）について

1 年生は、1 位は友達（55 件）、2 位は親（38 件）、3 位は誰にも相談しない（15 件）、4 位は兄弟（6 件）、5 位はその他（2 件）。2 年生は、1 位は友達（44 件）、2 位は親（38 件）、3 位は兄弟（11 件）、4 位は誰にも相談しない（9 件）、その他（2 件）。3 年生は、1 位は友達（44 件）、2 位は親（31 件）、3 位は誰にも相談しない（16 件）4 位は兄弟（10 名）その他（3 件）。4 年生は、1 位は友達（32 件）、2 位は親（27 件）、3 位は兄弟（6 件）、4 位は誰にも相談しない（4 件）、その他（3 件）で、全ての学年で一番多かったのは友達であった。

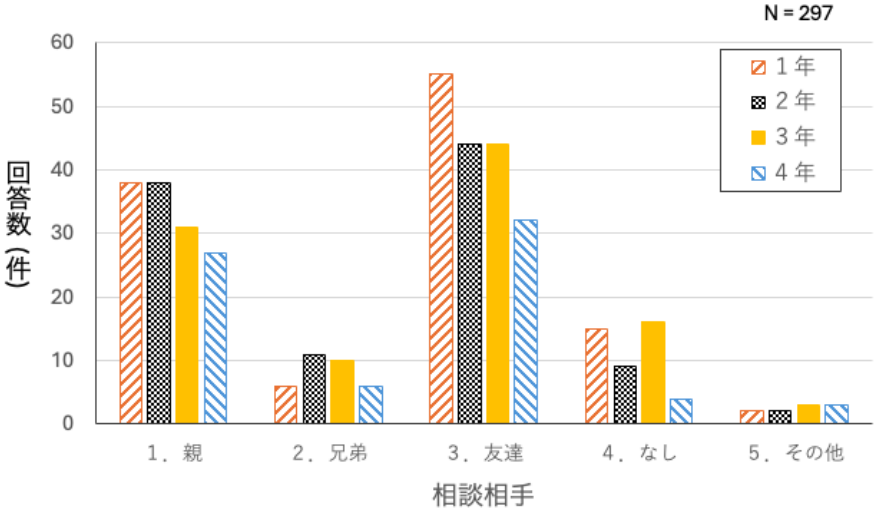

図 2　相談相手（複数回答）

4. 学年間の自己効力得点の比較

二元配置分散の結果、自己効力得点の学年間比較と決定した看護職種への思いの比較では、$p < 0.01$ で有意に差が認められた（表 2）。各学年の自己効力得点の平均値は、1 年生は 82.2（SD ＝ ±12.1）に対して 2 年生は 82.1（SD ＝ ±12.2）であり、1 年生は 2 年生にかけて緩やかな上昇傾向がみられるが、3 年生 76.2（SD ＝ ±13.6）と低下し、4 年生では 83.9（SD ＝ ±9.6）と再び上昇がみられた（図 3）。

表 2　職業に対する自己効力得点と決定した看護職種に対する思いの二元配置分散分析

要因	平方和	自由度	平均平方	F	p
学年	1557	3	519	3.902	0.009**
決定した看護職種に対しての思いとして	5412	3	1804	13.564	< .001**
学年 × 決定した看護職種に対しての思いとして	1453	9	161.44	1.214	0.289
残差	37373	281	133		

p < 0.05 *, p < 0.01 **

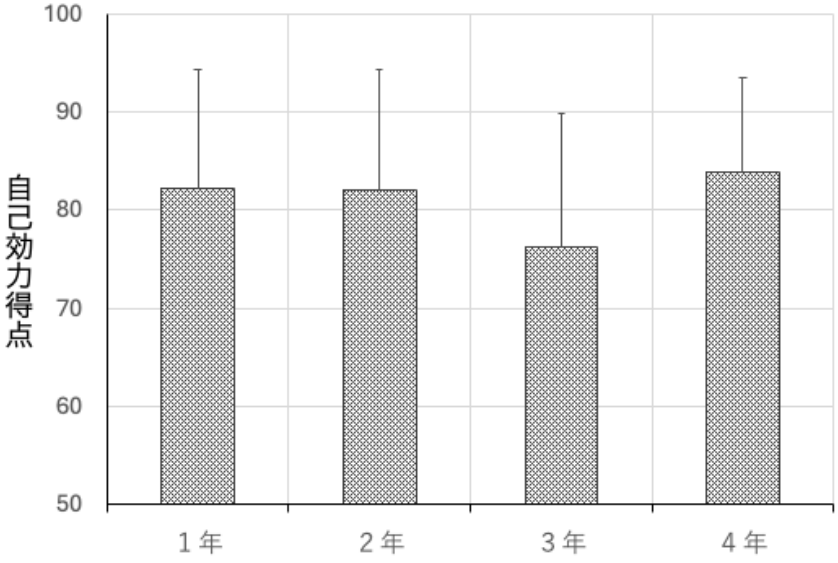

図 3　各学年における自己効力得点の平均値

5. 決定した看護職種への思い別の自己効力得点の比較

1 年生から 4 年生の学年と決定した看護職種に対しての思い別に自己効力得点を二元配置分散分析にて比較した結果、$p < 0.01$ で統計学的に有意な差が認められたが、交互効果では有意な差は認められなかった（表 2)。決定した看護職種への思いごとの自己効力得点の平均値は、「1．絶対になる」と答えた人は 188 人で、自己効力得点の平均値が 84.5（SD ＝ ±11.0)、「2．迷いが出てきた」と答えた人は 41 人で、自己効力得点の平均値は 73.5（SD ＝ ±10.2)、「3．なりたくない」と答えた人は 18 人で、自己効力得点の平均値は 71.2（SD ＝ ±12.7)、「4．わからない」と答えた人は 36 人で、自己効力得点の平均値は 75.4（SD =±13.3）であった（図 4)。

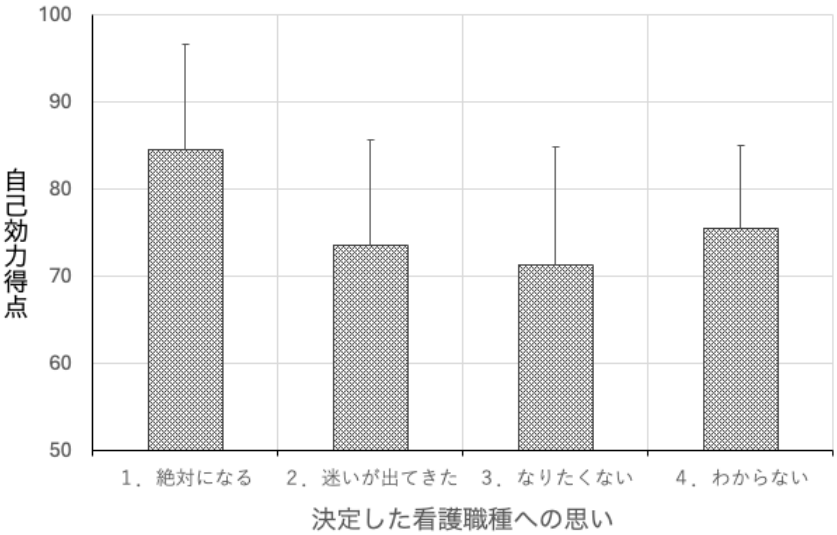

図 4　自己効力得点と決定した看護職種に対しての思い

Ⅵ. 考察

1. 希望職種と決定した看護職種への思いに対する学年別の特徴について（表 1、図 1）

1 年生は、入学当初からオンライ授業が開始となり、大学生活が自宅で過ごすことを余儀なくされたが、78.7％が看護師を希望しており、「看護師に絶対になる」割合が一番高く、「なりたくない」が 0％だった。これは、看護師を目指し入学したばかりであること、感染症の知識はこれから修得していくこと、何より看護師になりたい思いが高く、COVID-19 禍における看護職の不安影響は受けていないと考えられる。

2 年生は、助産師希望が他の学年より高い。A 大学は助産師課程を有する大学であり、助産師を目指し大学選定したこと、2 年次から母性看護学の授業が開始されたことが影響している可能性がある。また、助産師希望は 1 年生が 5.6％と低く、これは、学年別の特徴の差として推察する。

3 年生は、「絶対に看護師になる」割合が低く、「迷いが出てきた」、「なりたくない」が 1 番高い結果になっており、COVID-19 禍における不安影響を受けつつあると推察する。A 大学は、1 年次に養護教諭課程、2 年次に保健師課程が決定するため、看護職の進路決定が影響していることが考えられるが、4 年生と比較してもかなり低い。この要因については後述する。

4 年生は、「絶対に看護師になる」が 2 番目に高かった。この時期は、ほとんどの学生が就職先を決定しており、看護師になる覚悟や決心からこのような結果につながったと考える。しかし、「わからない」も一番高かった。A 大学の 4 年生は、3 年次の実習が一部中止となり、4 年次の在宅実習、主題実習も学内実習へと変更を余儀なくされた。世界的に大流行した COVID-19 によるパンデミックは、医療知識を身に付けた 4 年生だからこそ、計り知れない感染症に対する不安影響は受けつつあるのではないかと推察する。

2. 学年間の自己効力得点の差異によるサポート体制について

2020 年に蔓延した COVID-19 の影響に伴い、A 大学は、座学から ICT を活用したオンライン授業へと授業形態が変化した。特に「悩んだ時は誰に相談するか」については、全ての学年において「友達」が最も高かった。登校規制による学生間の交流制限により友人（友達）とも十分に会う時間が減少し、直接的な不安軽減の機会が失われていたが、SNS を介したコミュニケーションを得意とする若者 [9] は、メールやラインを介して、友人（友達）に相談できていた可能性が考えられる。一方で、COVID-19 の感染隔離対策中の大学生は、抑うつや不安などのメンタルヘルスの問題が増加していることが明となっている [10]。そのことから、未知のウィルスによる感染拡大は、学生生活の変更を余儀なくされ、メンタルヘルス対策の必要性が示唆されていた。また、連日、マスメディアから発信される COVID-19 の情報から先行きが見えない感染対策が、看護職を目指す学生には不安を増強させている要因の一つであると考える。

決定した看護職種への思いに対する自己効力得点は、3 年生が大きく低下していた。これは、上記の要因に加え、アンケート調査時期が実習前の 9 月ということもあり、これまで体験したことのない感染症の発生は、臨地実習に臨む学生の不安を増強させ、看護師になる意思を減退させる要因につながるのではないかと推察する。看護大学 3 年生が実践する実習は不安やストレスが大きく、そこに感染拡大がさらなる不安の増強を招いていると捉える。髙岡ら [11] は、COVID-19 禍における看護学実習に対する学生の思いについて、「実習中に患者さんやその家族、医療者、実習メンバー等に感染させないか不安」、「患者が重症化し生命に関わることの責任の重大さや責めを負いたくないという思い」があり、自身が感染源になることへの不安が高く、また、「感染予防をしている医療従事者も感染する」といった予防対策の効果に対する不安が挙がっている。そして、実習施設によっては実習が中止され、学内実習へと

変更を余儀なくされたり、実習時間を短縮して実習に臨む学生らが増加した。そういった学生からは、「実際の病院で実習ができず、臨床での経験不足になることが心配」、「働いてからの自分が想像できず不安」、「就職後不利になる可能性があるのでは」などが懸念されており[11]、実習が十分に行えず、将来、看護師としての就職や就職後への不安が、3 年生の決定した看護職種への思いに対する自己効力を低下させている要因の一つではないかと考える。

そこから、自己効力を高める教員のサポート体制について、まずは、感染対策に対する教育的支援が必要となる。これは大学教員、健康管理センター、実習施設と協働し、臨床現場における現状や感染対策について、最新の情報を教授することで学生に少しでも不安を払拭する働きかけが重要であると考える。

次に学内実習や時間短縮実習に関して、文部科学省[12]の「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書（2021）」によると、臨地での実習が叶わなかった際に、シミュレーションやロールプレイなどの教育方法の活用や、地域住民の協力といった資源活用し、教員の教育力の向上・開発が重要であると指摘されている。教員間で調整を図り、教育の質の向上を目指した学内実習内容を検討していく必要がある。

そして、学生は実習に対する不安やストレスを伴っており、教員として学生個々の不安を真摯に受け止め、対応していくことが重要であると考える。

3. 決定した看護職種への思いと自己効力得点の関係性について

決定した看護職種への思い別の自己効力得点の平均値を比較した二元配置分散分析の結果では、$p<0.05$ で有意な差がみられた。これは、自己効力感が決定した看護職種への思いに何らかの影響を与えている可能性があることが考えられる。自己効力得点の平均値では、「絶対看護師になる」と答えた学生の自己効力得点は 84.5（SD ＝ ±11.0）で最も高い反面、消極的な回答をした学生の自己効力得点は、「迷いが出てきた」73.5（SD ＝ ±10.2）、「なりたくない」71.2（SD ＝ ±12.7）、「わからない」75.4（SD ＝ ±13.3）といずれも 70 代であり、「絶対看護師になる」と回答した学生の自己効力得点より低くなっている（図 4）。一般大学生を対象とした研究では、職業的アイデンティと自己効力の間には正の相関があるといわれているが[13]、看護職への思いが消極的な学生の自己効力得点の低下は、看護学生においても職業アイデンティティが自己効力に影響することを示唆する結果ではないかと考えられる。本研究では、3 年生で特に自己効力得点が低下しているため（図 2）、実践における成功体験を増やす等[14]、自己効力向上に対する対策を講じる必要がある。

Ⅶ. 結論

看護大学生 1 ～ 4 年生を対象に職業意識に関するアンケート調査の結果から以下の点が明らかになった。

1. 各学年における自己効力得点の平均値の比較では、3 年生が大いに低下している。これは、 臨地実習を前にした不安に加えて、COVID-19 感染拡大がさらに不安を増強させているのではないかと考えられる。
2. 学年間での決定した看護職種への思いの比較では、3 年生では他の学年と比較して消極的な回答の割合が増えているが、COVID-19 感染拡大の影響も考えられる。
3. COVID-19 禍における 3 年生のサポート体制としては、メンタルヘルスケアの必要性、感染予防対策の教授、学内実習の充実化が重要であることが示唆された。

研究の限界と今後の課題

今回の研究では、A 大学 1 校の学年比較であり、297 名の看護学生を対象にして得られたデータであるため、本研究結果だけでは一般化するには限界がある。また、3 年生の自己効力感得点の低下が、COVID-19 禍における影響を受けているかどうかにおいても課題が残り、今後は、感染拡大の収束の頃を見計らい、職業意識調査の継続研究を実施することが必要であると考える。加えて、本研究は自記式質問調査のため、看護学生の職業意識に対する自己効力低下の要因、職業意識に対する「わからない」と回答した内容については、質的研究で具体的内容を明らかにしていきたいと考える。

謝辞

本研究に調査協力いただきました森ノ宮医療大学の井手口教授ならびに A 大学 1 ～ 4 年生の学生に深く感謝致します。

付記

本研究は、内容の一部を 2023 年度 EAFONS で発表し、加筆・修正したものである。本研究における利益相反は存在しない。

文献

1）竹田駿介．青年期における対人関係性の変化によって自己が変容することについての一考察．応用心理学研究．2021;46（３）：207-215.

2）岡田努．青年期の友人関係における現代性とは何か．発達心理学研究．2016; 27（４）：346-356.

3）箕浦とき子，高橋恵．看護職としての社会人基礎力の育て方［第 2 版］．日本看護協会出版会, 東京．2018；4-5.

4) E．H．エリクソン 著 , 西平直, 中島 由恵 (翻訳)．アイデンティティとライフサイクル．誠信書房, 東京．2011；99.

5）田辺幸子，水田真由美．看護系大学生の看護職志望の程度が高まる要因からの教育的支援の検討．日本医学看護学教育学会誌．2021；30（2）：34-43

6) 吉岡由喜子，山本純子， 髙木みどり．看護大学生の職業意識の特徴―1・2 年次生の自我同一性と看護職の就業動機の調査よりー．太成学院大学紀要．2012；14：255-266.

7）浦上昌則．学生の進路選択に対する自己効力に関する研究．名古屋大學教育學部紀要 . 教育心理学科巻 . 1995；42：115-126. 教育心理学研究.

8）アルバート・バンデューラ，玉瀬耕治，福島脩美，（重久剛，大元誠 訳）．祐宗 省三，原 広太郎，柏木惠子，春木豊 編集 . 新装版　社会的学習理論の新展開 . 第 3 版．東京．金子書房．2019；36-37.

9)長谷川寿一. 人間行動進化学から見た今どきの若者. 児童青年精神医学とその近接領域. 2019;60(3).

10）久木原 博子.【新型コロナウイルス感染症関連】COVID-19 流行期における大学生のメンタルヘルスに関する文献レビュー．キャリアと看護研究．2020；10（1）：3-13.

11)髙岡寿江, 石堂たまき, 藪下八重．新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む 7 学生の思い．佛教大学保健医療技術学部保健医療技術学部論集．2021；15：55-68.

12）文部科学省（2021）新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の 臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書　看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について．https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf（参照 2023.09.30）

13）児玉真樹子，松田敏志，戸塚唯氏，深田博己．大学生の進路選択行動に及ぼす自己効力および職業

的アイデンティティの影響．広島大学心理学研究．2002；2：63-71．
14）前掲書 8）：40-41

A Cross-Grade Comparison of Self-Efficacy Affecting the Professional Attitudes of Nursing Students in the COVID-19 Disaster

Yoshiko Miyamoto [1], Tadahiro Nishiyama [1]

[1] Department of Nursing, Faculty of Nursing, Morinomiya University of Medical Sciences

Abstract

The purpose of this study was to obtain insight of support system for professional attitude of nursing students under the COVID-19 pandemic. We conducted a self-efficacy survey about career choices for nursing college students (from the 1st grade students to the 4th grade students). The students were required to fill out the questionnaire. The questionnaire was consisted of 30 items 4-point scale for self-efficacy. There were 297 students responded. We conducted a two-way ANOVA on the conditions, and the result showed a significant difference in the self-efficacy of glades and professional attitude ($P<0.01$). The self-efficacy points of the 3rd grade students were lower compared to other glade students, and there were more negative answers of professional attitude compared to other glade students. The results suggest that a support system is needed especially for the 3rd grades. Such as mental health care, education infection prevention, and enhanced on-campus practical training under the COVID-19 pandemic.

Key words: COVID-19, Nursing student, Professional attitudes, Self-efficacy